

三十才のハローワーク

第7回 39歳からでも、間に合った！ 石原直之さん 42歳

今回は応募ではなく、こちらから押しかけての取材。神奈川県横須賀市に「元ひきこもり」の方々だけが集まって本屋さんを開店したという話を聞き、伺うことにした。店の名前は「はるかぜ書店」。その中心人物は、なんとひきこもり歴15年の強者だった。

なんと15年間もひきこもり続けた40男がいた。それが2年後には、本屋さんの店長として日々忙しく楽しく働いていることになろうとは。「はるかぜ書店」の石原店長は、いまの状況が自分でも信じられないと言った。

——ひきこもり歴15年とはすごいですね。20代になってからですか。「ひきこもり始めたきっかけは、正直言ってよくわからなくて。いつの間にかという感じだったんですね。普通に大学に入って、なんなく怠けているうちに留年してしまって。卒業した時にはもう20代中盤になっていたもので就職活動も億劫で、ぶらぶらしているうちに30になっていた。ただその頃は病的に閉じこもっていたわけではなくて、近所の中古ゲーム屋と図書館に通って、金は使わずにはくつこく退屈しない毎日を過ごしていました」

——ゲームが好きだったんですか。「スーパーファミで『ドラクエ』シリーズ遊び始めたのが最初です。その後セガサターンに移ったんですが、サターンでインターネットができるということを知り、中古屋でモディムを買ってきました。それからはネットに夢中になりました。あちこちの掲示板をROMったり、自分では懸賞の情報サイトを作成したり。そのうちオンラインゲーミングっていうのがおもしろそうと思って。『FF XI』が始まるとき、ブレスステ2を買ったんです。以降は、まったく部屋から出なくなりましたね」

——ドハマリですね。

「ネットゲームって基本的に、プラスの言葉をかけあう世界でしょ。1つレベルアップしただけで『おめでとう』や『がんばったね』の嵐です。ひきこもりの身に、それがとても心地よくて。ヴァナ・ディールで1、2年はあっと言う間に過ぎましたね」

——その段階でもう30代後半ですね。

「ええ、でも39歳のときにいきなりやめて、外に出たんです。きっかけですか？ ……失恋です」

——ひきこもっていて恋愛？

「ネットゲーム恋愛です。ゲームのキャラの姿をした人に本気で片思いでしまって。そう、実世界ではけっきょく一度も会うことがなかったんですね……」

——最近よく聞く話ですね。

「パーティ組んでいて、向こうは男性キャラでしたから、ずっと男のプレイヤーだと思っていたんです。ところがある時、女性だと聞いて、それで急に意識するようになった。なんか1人でどんどん盛り上がりがちって、ヴァナ・ディールじゅうをずっとついで回るようになっていました。ストーカーですね。そしたら相手がどうとうキレイで、どういうつもりなのと聞かれました。それで好きになっちゃったと告白したら、ゲームの中でしか会ったことない人と恋愛なんてバカじゃないの、みたいに手ひどくフラれました」

——うーん。それもよく聞くパターンですね。

「ものすごいショックで。涙が出てきて、そのことが自分でも驚き

でした。ずっと、そういう強烈な感情体験がなかったんですね。15年間、一度も泣いてなかっただけです。自分も、泣けるんだ、なら、もしかしたらまだ、何かできるかもしれない。そう思って、すぐ外に出ました。39歳の男が泣きじゃくりながら往来を歩いてるなんて、いま考えるとよく通報されなかったものだと思いますが、そのときは生きたい、と本気で思っていたんですね。どこに行けばいいのかわからなかったんですが、とりあえず保健所に入ったんです」

——保健所って、捨て犬じゃないんだから。

「いや、保健所でよかったんですよ。厚労省のひきこもり対策プログラムの窓口は、保健所にあったんです。それで、このNPOが運営している就労支援講座を紹介してもらったんです。すぐに参加することになりました。それがすごくうまくいきました。半年で修了するコースなんですが、そのあともボランティアスタッフとして残り、働くようになったんです。NPOのスタッフや受講者、つまり元ひきこもりの仲間でわいわいやっているのが、とても楽しかったんですよ」

——なるほど。けれど講座の最終目的はどこかに就職することなんですね？

「そこが問題なんです。やる気があっても、いろいろ勉強しても、いい年こいて履歴書が真っ白だとやはりなかなか雇ってくれるところがないんです。私もほかの受講者も、その点をすごく悩んでいま

そんな「はるかぜ書店」にゲームラボは置いてませんでしたとさ。

text by

渡辺浩式

coordinate by

ジャンクハンター吉田



ミスドのレシートに「アルバイト大募集」との告知が。いまの若い人々は、飲食店のバイトをしたがらないらしい。それって大問題な気が…。日本もチップ制度を導入すればいいんじゃない？



して。ならいそ自分たちで何か商売始められないか…そんなアイデアがふと、出てきた。そこからとんとん拍子でした。シャッター街化が進みつつあった商店街の活性化にもなるということで空き店舗を提供してくれる方がいらっしゃいまして、そして非常に幸運なことに県から助成金を受けることもできました。話が出てから1年、つまり私が部屋から出てから2年めの今年5月に、開店しました」

ひきこもり力で 新しいビジネスへ

——それは石原さん、あなたすごい実務能力ですよ。ひきこもりのくせに。あ、失礼。

「ははは。ネットゲームで鍛えられたコミュニケーション力がありますからね。いやこれ、冗談ではなくて。MMORPGって、擬似的な社会を体験できるじゃないですか。相手のご機嫌をうかがったり、接待プレイみたいなこともするわけです。この現実もその延長だと思えば、いろいろな交渉ごととか接客なんかも、けっこうすんなりできるものなんです」

——おお、それは全国のひきこもりのネトゲ中毒者にとって心強いお言葉です。

「あ、みんな、というわけではありませんが」

——そりやそうですよね。本当の廃人もいっぱいいるわけです……。

「けれども、ネトゲ経験者に限らず、ひきこもりの人ならではのパワーってあると思います。うちでは元ひきこもりばかりが5人、入れ替わりで働いているんですが、

います。それから、今後はインターネットも活用していきたいですね。アマゾンなどとは違う切り口のオンラインショップで、なんとかひきこもりの人がひきこもりの人に売る、そんなやり方がありえるんじゃないかなと……」

そういう発想が出るのは、やはり石原さんが元ネトゲ中毒のひきこもりだったからだろう。そういう人々のそういう経験値が、これからいろいろな形で社会に出てくると、僕は予想する。

■公式ブログ「三十才のハローワーク」
<http://www.hikikomo.com/>

■ブログ設置協力：スマートホスティング
<http://www.smart-h.com/>

ひきこもりの人、募集中!!

（応募方法）

氏名・性別・連絡先・年齢・ひきこもり歴・自己アピールを編集部まで送ってください。採用者にのみ連絡。作品などは返送できないことがあります。また、自薦だけでなく、他薦も歓迎します。

（宛て先）

〒104-0031 東京都中央区京橋3-14-6
齊藤ビル 株式会社三オブックス ゲームラボ編集部「三十才のハローワーク係」